生するもの多し。

澎湖島は臺灣海峽中にあり、大小五十餘の島より成る、澎湖本島最も大なり。漁翁島、白沙島之につぐ、三島相依て三ッ巴の狀をなし、中に澎湖港を擁す。航行の船舶は、こゝに臺灣海峽の暴風を避くるを得べし。全島住民凡そ五萬人、土地低く、水に乏しく、島中米穀を產せず、僅に落花生等を植ゑ、又鷄豚の類を飼養し、之を本島に送りて、米穀と貿易するなり。澎湖本島の西部に媽宮港あり、一に馬公と稱す、軍事上、交通上に最も樞要なる所として、現に海軍の要港となり、又要塞砲兵の駐屯せるあり。

參考書 臺灣志（參謀本部編）一冊　重修臺灣府志八冊
臺灣諸島誌（小川琢治著）一冊

第九節　北海道

北海道廳管轄三區十八支廳及國郡表

區及支廳名	郡名	國名
小樽區		
小樽支廳（小樽、高島、忍路、余市、古平、美國、積丹）		後志國
岩內支廳（岩內、古宇、（膽振國虻田郡中の一村を加ふ））		
壽都支廳（壽都、島牧、歌棄、磯谷）		
檜山支廳（久遠、奥尻、太櫓、瀨棚、檜山爾志）		
松前支廳（松前）		
函館區		
函館支廳（龜田、上磯、茅部）		渡島國
山越		
室蘭支廳（室蘭、有珠、虻田の大部、幌別、勇拂、白老）		膽振國
札幌支廳（千歲）		
札幌、石狩、厚田、濱益		石狩國
札幌區		
空知支廳（空知の大部、夕張、雨龍、樺戶）		

上川支廳（上川、空知の一部……）
　上川、中川……
　增毛支廳（增毛、留萌、苫前、天鹽……）　天鹽國
　宗谷支廳（宗谷、枝幸、利尻、禮文……）
　網走支廳（網走、斜里、常呂、紋別……）　北見國
　浦河支廳（浦河、沙流、新冠、靜內、三石、樣似、幌泉……）　日高國
　河西支廳（河西、河東、上川、中川、十勝、當緣、廣尾……）　十勝國
　釧路支廳（釧路、白糠、足寄、阿寒、川上、厚岸……）　釧路國
　根室支廳（根室、花咲、野付、標津、目梨……）　根室國
　　國後、色丹、得撫、新知、占守……
　根室支廳（紗那、振別、擇捉、蘂取……）　千島國

右一道廳十一國三區十八支廳八十八郡二十八町五百六十九村

北海道はもと蝦夷が島、或は蝦夷の千島と云へり。後分つて十一國となす。

渡島、後志、膽振、石狩、天鹽、北見、日高、十勝、釧路、根室、千島これなり。齊明天皇の朝、阿倍比羅夫が越の蝦夷（日本海方面にして、越後より出羽、津輕の邊ならん）を征するや、津輕の蝦夷等と共に渡島の蝦夷、膽振、釧の蝦夷などを集めて、之を饗したることあり、又後方羊蹄を政所となし、郡領を置いて歸れり。渡島、後志、膽振振等の名、蓋しこれより出でしなり。然れども、これ等の地が、比羅夫の遠征中に見えたる、地名に相當するや、然らざるやに就ては確證なく、又、渡島をヲジマと訓むに就ては、其理由を知らざるなり。また、景行天皇の朝に、武內宿禰東夷を探檢して、蝦夷の中に日高見の國ある事を云へり。之れ日高の國名の起原ならん。然れども、所謂日高見の國は、近時の學者之を陸前の一地方に求めんとするなり。北見の名は、北海に面するを示し、千島の名は、所謂蝦夷の千島の名を、其數多の島嶼羅列する境に名づけしなり。其他の國名は、蝦夷語に其起原を有するなり。其他、北海道の地名多く蝦夷語より來るものにして、永田方正氏の蝦夷語地名解あり、よく之を說明したり。今左に地理に關する普通名詞の少許を說明せん。（一）ヌプリとは山の義な

り、マクカリヌプリ跡左登の如し、(二)ベッとは川の義なり利別、尻別の如し。(三)シリとは土地の義なり、網走、國後の如し。(四)ナイとは澤の義なり、岩内、幌内の如し。(五)コタンとは場所の義なり、神居古潭、積丹の如し。尚精しくは、右の地名解又はアイヌ語辭典に就て調査すべし。

アイヌ風俗

北海道は、古く蝦夷即ちアイヌ種族の民の住所として、蝦夷地或は蝦夷島の名あり。アイヌは、毛髮鬚髯の甚多き種族にして、全身毛を以て被はれ、支那の史籍に毛人などと見えたり。男子は鬚髯垂れて胸を被ひ、中には數尺に達するものもあり。婦人は口邊及び眉に入墨して、其既婚たるを示す。また一般に耳輪を用ふるが如き風習あり。此種族が古代本州に蔓延したり

アイヌの内附

し事は、すでに總論に於て之を述べしが如し。日本武尊、阿倍比羅夫、大野東人、坂上田村麿等、歷朝征討の事ありて、次第に王化に浴し、朝廷またよく之を撫恤せしかば、早く已に持統天皇の朝には、蝦夷人にして、自ら請ふて出家し、僧となれるものすら出づるに至り、所謂熟蝦夷なるもの次第に增加せり。熟蝦夷は、すでに齊明天皇の比に存在して、同天皇の五年に入唐したる遣唐使が、唐の天子の下問に答へて、蝦夷に三種あり、遠きは都加留と名づけ、次は麁蝦夷、次は熟蝦夷と名づく。今此の熟蝦夷、毎歲本國の朝に入貢す、云々、と答へたる由見えたり。此等の熟蝦夷は、何れも天孫種族と同化し混入し、奥羽地方遂に一人の麁蝦夷なきに至れり。然れども鎌倉時代の末葉までは、奥羽に於ける熟蝦夷が、全く天孫種族と同樣の風俗を採用しながらも、尙自らアイヌたることを自覺し、他よりもアイヌとして認識せられしものなりしが、其後戰亂相つぎ、人民の移轉、豪族の隆替等も多く、混亂の世を經て、子孫は自ら祖先がアイヌなりし事を忘却し、他よりも亦之を區別する事なきまでに、全く同化して、遂に本州中一人のアイヌなきに至りしものなり。人或は本州に於けるアイヌの滅絕を云ひ、或は北海道に逃れしものなりと解す。蓋し固より幾分かは之あらん、然れども之れ一を知つて二を知らざるもの、アイヌが天孫種族に混入せしことは、種々の史籍の記する所亦疑を容れざるなり。然るに、一葦帶水を隔つる北海道のアイヌは、この混入の機會を得ずして、遂に後世まで麁蝦夷のまゝに殘るの已むを得ざらしめたり

三種のアイヌ

アイヌの日本同化

都加留蝦夷及コロボックルの辨

都加留蝦夷の事明ならず、一說に佡蝦夷は今日の北海道土人にして、都加留蝦夷は、之よりも尙奥地に住せしもの、即ちアイヌの口碑に所謂トイチセグル、又はコロボックル、又はクルムセ等と稱する別種の夷にして、現今千島アイヌとして存在し、土中に住み、石器を用ふるものならんと云ふ。此說に從へば、各地に貝塚を殘し、石器土器を留むる種族は、即ち所謂都加留アイヌにして、今日の色丹島に住する千百土人と同種のものとなるなり。こゝに記して後日の研究を俟つ。

蝦夷地經營の事

阿倍比羅夫

今、本邦人が北海道經營の蹟を尋ぬるに、早く已に阿倍比羅夫の時に於て、渡島蝦夷內附の事あり、通例渡島は北海道なりと解す。奈良朝を經て、平安朝に至るまで、渡島蝦夷內附の事しば〳〵ものに見ゆ。一條天皇長保年中、蝦夷亂れて、陸奥の人安倍國東海を渡りて之を征したることあり。源頼朝奥羽を統一するや、藤原泰衡は蝦夷に遁れんとして、遂に殺されしも、其徒多く渡りて、所謂渡り黨となる。此時安東季信は、功を以て津輕の守護に任せら、れ蝦夷地を管領し、其後鎌倉時代には、夜討强盜等の罪人を、此地に流竄せし

安倍國東

渡黨

安東季信

下國氏

松前氏

松前氏のアイヌ制馭政策

ことあり、其徒の子孫多く壘を築て之に居る所謂館主之なりと云ふ。○北海道志による

室町時代に至り、安東盛季、南部氏に逐はれて海を渡り、下國氏と稱す。後、後花園天皇享德年間に、若狹の武田氏の族、信廣海を航して來り、蝦夷の亂を平げて功あり、蠣崎氏を冐し、子孫相ついで遂に盡く夷地を領す。之れ即ち松前氏なり。德川時代に及びては、城を渡島の福山に築て之に居り、廣く夷地を管す。德川幕府は、退守主義を取りて、蝦夷地の經營を重んせず、之を松前氏に放任せしかば、松前氏は專ら漁業の利を求めて、夷人を愚にし、之に文字を敎へず、之に農耕の道を授けず、つとめて固有未開の夷風を守らしめ、以て御し易からしむるの政策を取れり。北海道のアイヌが、同化の機會を得ずして今日に殘れるは、其原因大にこゝにあり。內地人がアイヌを愚にしたりし一二の例を言はゝ、彼等は一抓みの煙草、一杯の酒を以て、よく力役をアイヌに强ひ、アイヌが寶物として使用する漆器の如きは、屈强の男子が數年の勞役の報酬として得しもの、アイヌが一口の鈍刀を得んには、一人にては事足らざるが故に、親戚故舊等數人の力を借り、數年力役せざるべからざり

しなり。

アイヌの叛亂

斯の如き松前氏の政策に對して、有爲のアイヌは其不平を訴ふるに道なく、しば〳〵暴舉を企てたり、中にも寛文年間のシャクシャインの亂の如きは最も著し。シャクシャインは、今の日高國染退（シビチャリ）の酋長なり、出羽の人集來て其女婿となりタットーインと云ふ、父子亂を企て、松前氏に叛いて夷地の利を專にせんとせしなり。固より松前氏の武力に敵すべくもあらず、容易に鎮定せしかども、斯の如き爭亂の爲に、アイヌが人命を損するもの少からざりしなり。また安永天明のころより、疱瘡輸入せられて、醫業に乏しく治療の方法なかりしかば、激甚なる流行によりて、人命を損せしこと、また少からざりき。

疱瘡

アイヌ減少の次第

斯の如くにして、死亡の數生産の數より多かりしかば、アイヌは次第に其數を減じ、遂には、維新後僅に、一萬六七千を算するの憐むべき狀態に陷れり。尤もこの減少に就ては、アイヌが內地人と混同せしものも、幾分かは之れあるべし。人或は、維新後內地人多く移住して、アイヌは競爭に堪えず、爲に甚しく減少したるが如く考ふるものなきにあらざれども、そは皮相の

觀察にして、明治政府は、土人の保護法を講じ、之を導きつゝあり、之を統計に徵するも、却て增加の傾を示す。統計年鑑によるに、左の如し。

アイヌの人口

明治五年	一五、二七五、	明治十五年	一七、一九八、
明治二十五年	一七、一四八、	明治三十三年	一七、二九八、

而して明治三十三年中の、生産は六六一にして、死亡は五〇二なれば、總人口に對して、凡そ百分の一の割合を以て、增加せるものと云ふべし。今三十三年末に於ける、人口を國別にすれば左の如し。

渡島	二二五、	後志	七一三、	石狩	九七七
天鹽	二二五、	北見	九五〇、	膽振	三、九八一
日高	六、二〇六、	十勝	一、六六二、	釧路	一、四〇三
根室	四〇四、	千島	五五二、		

開拓使

明治政府は、意を北海道の開拓に用ひ、明治二年函館に開拓使を置き、三年には特に樺太開拓使を設置し、四年開拓使廳を札幌にうつし、各地に支廳出張所を設け、專ら移住拓殖を奬勵せり。明治八年千島樺太交換後は、其境域も

確定して、拓殖の道ますゝ進歩せり。

維新後移住拓殖に從來せし重なるものは、仙臺藩の伊達邦成同邦直、片倉小十郎、德島藩の稻田邦植等なり。開拓判官岡本監輔の移せしもの亦少からず。明治三十二年に至りては、內地より來住せるもの、合計八十二萬人に達し、明治三十三年中に來住せるもの四萬八千百十八人、同年中に故郷に向つて去れるもの、七千八百四十六人、即ち差引四萬二百七十二人の增加を見たり。同年中に於ける移住の最も多き地方は、石狩にして、渡島、後志、十勝、天鹽、北見、膽振等順次之に次ぐ。其數左の如し。

石狩	一三、七八八、	渡島	八、四五二、	後志	七、七八六、
十勝	四、〇〇六、	天鹽	三、四七〇、	北見	三、四五〇、
膽振	三、三三五、	釧路	一、三二四、	日高	一、一二二、
根室	七一三、	千島	六六六		

又同年中の移住者の原籍は、石川縣最も多く、新潟、富山、青森、福井、秋田等の諸縣、順次之につぐ。其五百人以上のものを擧ぐれば左の如し。

石川	五、六四一、	新潟	五、一五一、	富山	四、八八四、
青森	三、九〇二、	福井	三、六五五、	秋田	三、四三二、
山形	二、四七四、	宮城	二、三七九、	巖手	一、九四八、
德島	一、四四六、	香川	一、四〇〇、	福島	一、三七三、
岐阜	一、〇一五、	東京	八六九、	鳥取	七四二、
廣島	六四九、	愛媛	六四二、	兵庫	六〇五、
愛知	、五四三、				

北海道は地勢上本島と千島との二部より成る。本島は其形赤鰐の尾を振るが如く、千島は本島と露西亞領東察加との間に飛び石狀をなして並列せる火山列島なり。赤鰐の尾部は、渡島、後志、膽振より成れる半島にして、火山に富む。赤鰐の体部には對角線を成せる山脈はゝ十字形に交はり、川流四方に流る。西北には石狩川、天鹽川、東南には十勝川、釧路川等の大河なり。

大河の畔平野遠く連なり、今尙將來の移住拓殖を待ちつゝあり。政府は拓殖の便利の爲に鐵道を敷設して、交通の道を開きつゝあり。石狩の炭田地

方には、早く已に炭礦鐵道の設あり、官設鐵道は其後を受けて、更に內地に進みつゝあり。

鐵道線路の主なるもの左の如し。

炭礦鐵道手宮室蘭間、追分、岩見澤、札幌、小樽等を經て。

(支線) 夕張線、追分より分れ夕張炭坑地に通ず。

(同) 幌內郁春別線、岩見澤より分れ、更に二分して幌內及び郁春別の炭山に通ず。

(同) 砂川線、岩見澤より分れ、砂川に至る(別に支線あり)

官設旭川線、砂川旭川間、炭礦鐵道の後をうけ、砂川より起りて、旭川に至る。

官設天鹽線、旭川より東北にすゝむ。他日天鹽川に沿ひ北に進み、宗谷に至らんとするものなり。

官設十勝線、旭川より東南に進む。他日十勝川に沿ひて進み、釧路線に連絡せんとするなり。

官設釧路線、釧路より海岸に沿ひ布設す。他日更に延長して、東は根室に至り北は網走に至り、西は十勝線と連絡せんとするものなり。

右の外また、函館小樽間を連ねんとする、函館線(北海道鐵道會社)の一部をたすでに開通す。

以下國別に地理の大要を說かん。

渡島は津輕海峽を挾んで、本州の陸奥に對し、北海道の門戶にあたる。其端は東南に面して彎形をなし、彎形の中央部更に彎入して、函館港をなす。港內水深く大船を泊するに足り、人口八万に近く、北海道第一の繁榮を保つ。市街は半島に跨り、臥牛山を負ひて眺望よし。港は安政六年の開港にかゝる。函館の北一里、五稜廓あり、安政二年に函館奉行の經始する所、元治元年に至りて成る。其形五稜をなし、周圍の堀には、龜田川を引いて之に注ぐ。明治元年五月、一たび之を官軍の手に引き渡しゝに、十月に至りて、榎本大鳥等脫走逆の爲に奪はれて一旦其據る所となれり。五年城は廢せしも、石壘周濠

七飯農事試驗場

福山（松前）

江差

火山

後志

小樽

石狩

石狩川

何存し、今は有名なる天然氷製造所たり。其西北七飯村には、農事試驗場あり、函館より此地を經て、北方後志の小樽まで、鐵道布設せられんとす。

渡島の西南端に福山町あり。即ちいにしへの松前の地にして、松前氏の福山城址あり。西海岸には江差町あり、檜山支廳の所在なり。

渡島の東北は、内浦灣を隔てゝ膽振に對す。内浦灣は一に噴火灣と稱す、四近に噴火山多く、渡島には恵山、駒が嶽の如き著名なるあり。

後志は渡島の北に連なり、日本海方面の地方を占む。その東北部に小樽あり、繁華函館につぐ。鐵道によりて札幌及び、石炭諸炭山に通じ、海には横濱其他の諸港より、汽船の定期航海あり。之より西の方積丹半島を廻れば、沿岸に、岩内（イワナイ）壽都（スッツ）等の名邑あり。西南部の海上には奥尻島あり、漁業盛なり。

石狩は後志の東北に連れる大國にして、また日本海に面し、石狩川の流域地方を占む。石狩川は、本島の中央部なる石狩嶽より發し、諸水を集め、西南流して海に入る。長さ九十二里餘、本島第一の長流にして、本邦第二に居る、支流に雨龍川、空知川、夕張川、豐平川等あり。川に鮭多し。河畔廣漠なる平

石狩農田

札幌

旭川

神居古潭

野あり、以て農産の業を起すべく、東南部の山地は甚石炭層に富む。現今盛に採掘せる炭坑には空知（ソラチ）幾春別（イクシュンベツ）幌内（ポロナイ）、夕張等あり。此等の地へは、何れも炭礦鐵道通じて、西は後志の小樽、南は膽振の室蘭を連絡す、

豐平川に瀕して札幌あり、北海道廳所在の地にして、市街井然たり。こゝに札幌農學校あり、其他各種の製造會社ありて、砂糖、ビール等の産出多く、北海道拓殖の中心たり。圓山公園には札幌神社あり。

官設鐵道によりて、石狩川の上流にすゝまば、石狩原野を離れて、更に原野の別區域に出づべし。旭川は上川平野の中心にして、鐵道こゝより兩分し、十勝と天鹽との兩方面に向つて進む。旭川に第七師團司令部あり。上川平野は、遠く内地にありて、寒氣強きも、土地肥えて、將來殊に有望の地となす。

上川平野と、石狩平野との中間に神居古潭（カムイコタン）の絶勝あり。カムイコタンとは、神の場所と云ふ義にて、危岩奔湍相激する所、誠に神靈の境たるの感あるを云へるなり、後志小樽の東方沿岸にも、同名の所あり、懸崖高く峙ち、岩石起伏し、絶勝の景となす。

天鹽

天鹽は石狩の北に連り、天鹽川の流域地方と、日本海沿岸の地方とを占む。天鹽川延長七十餘里、本島第二の大河なり。沿岸には良港少なし、たゞ苫前、留萌、增毛など稍稱すべし。

天鹽炭田

苫前の近傍なるハボロ川筋及び留萌の內地には共に大なる炭田あり。苫前の西北海中に天賣燒尻の二小島あり、沿岸地方と共に漁業の利多し。

北見

北見は天鹽の東南に連なり、オコック海に面す。國は弓形を成し、北端宗谷岬は樺太に對す、鰊の好漁場なり。宗谷の西南にあたりて稚內あり、北部地方に於ける繁盛の地にして、海產物集散す。

稚內

稚內の西方、日本海中に利尻、禮文の二島あり、利尻は火山島なり。二島共に住民多く、漁業盛なり。オコック海沿岸には、枝幸、紋別、網走等の名邑あり。

枝幸の砂金

枝幸附近近年砂金を出す事多く、明治三十二年中の產額百十九貫目に達し、中には一顆の量百匁乃至百五十匁に至るものを採集することもあり。網走は、東は網走灣を控え、西方は網走、能取、猿間三大湖沿岸に並べるあり。

膽振

膽振は後志と背中合せをなして、太平洋に面し、東の方石狩の南方に伸ぶ。

火山

此國には樽前岳、惠庭岳、有珠岳、マクカリヌプリ、後別岳等の著名の火山あり。樽前有珠の如きは、時々噴火す。マクカリヌプリは、整備したる圓錐形をなし、蝦夷富士の稱あり。樽前岳の北に支笏湖あり、有珠岳の北に洞爺湖あり、山間の大湖にして、風景に富む。

室蘭

國の南端に槍鞘岬あり、內浦灣の口を擁す。岬の內面に室蘭港あり、炭礦鐵道の起點として、交通の便あり。此港は帝國五軍港の一として、第五鎭守府の開設せらるべき指定地なれども、未だ着手に至らず。或は陸奥大港に移さるゝならんと云ふ。

日高

日高は膽振の東南に連なる。海岸屈曲少なく、以て東南端襟裳岬に至る。此國はアイヌの最も多く住する所にして、全人口中の三分の一以上に及ぶ、西北部沙流川の附近は、殊に多く、佐瑠太、平取の如きは、アイヌの都と云ふべし。平取に義經祠と稱するものあり、土人の尊崇あつし。土人は義經をオキクルミと云ふ、奥州より逃れて、こゝに來り、土人に君臨せしなりと傳ふ。

義經の祠

もとより其證なし。思ふに內地より移れるもの、嘗て土人を撫恤し、感服す

オキクルミの祠
新冠牧場
シャグシャインの墨
十勝
釧路
火山
跡左登の硫黄
牡蠣島
根室

る、一の方便として、土人の傳ふるオキクルミなる勇者に附會し、かゝる說を敎へしものならんか。沙流の東南、新冠には著名の牧場あり。之より東南染退川附近の茶志骨には、シャグシャインの墨址あり。

十勝は日高の東北に連り、十勝川の流域地方を占む。河畔大平野あり、土地肥え、有望のなり。但水利未だ治らず、洪水の害を被る事あり。河口の大津十勝、中流の帶廣なぞは、此國の名邑なり。

釧路は十勝の東北に連り、北は千島火山脈を夾んで北見に接す。火山脈中火山多し。摩周湖、屈斜路湖、阿寒湖なぞは、何れも火口湖にして、雌阿寒岳は阿寒湖の西に峙つ。屈斜路湖の水は釧路川となり、阿寒湖の水は阿寒川となり、下流は合して釧路港に注ぐ。屈斜路湖の東、跡左登には、盛に硫黄を産出す。釧路港より東に進まば、厚岸灣あり、灣口に厚岸港あり。港口の大黑島よりは、昆布を産す。灣內の牡蠣島は、牡蠣多く、全島牡蠣殼より成ると稱せらる。厚岸の地方一帶に牡蠣多きなり。

根室は本島の東端にあり、南隅なる花咲半島は、北方の知床半島と相對し

千島
占守島
三十二島の面積住民
日露の境界

て、國弓形をなし、根室海峽を夾んで千島の國後島に對す。知床半島に、硫黄山、良牛岳等の火山あり、千島火山脈に屬し、之を以て北見との境とす。花咲半島に根室港あり、要津なれども、冬季氷結し、或は流氷の害を被ることあり。西別川、標津川等東流し、根室海峽に注ぐ、鮭の漁多し。

千島は三十二島、國後に始まり、占守に終るまで、斜に東北に羅列す。占守島は我國の極東にして、郡司海軍大尉等、報効義會の諸氏近年率先して移住し、漁獵に從事し、以て北川の經營にあたる。移住民七十餘人に過ぎず。千島中擇捉等最も大にして、幌筵、國後、得撫、新知等の諸島之につぎ、恩爾古丹、捨子古丹等の諸島また之につぐ。面積合計はゞ四國に近けれども、住民は四千五百餘人に過ぎず。これ其地北方にありて、殊に寒流の影響を受くるによりて、氣候甚だ寒ければ、未だ多く產業の發達を見るを得ざるなり。從つて、國後、擇捉、色丹、得撫等、本島に近き諸島と、右に述べたる占守島との外は、何れも無人島なり。

擇捉と得撫との間の海峽を擇捉海峽となす。もと本邦と露西亞との境界

近藤重藏

蠣塚の碑

德川幕府千島經營の事

は、此海峽を以てしたるものにて、明治八年從來雜居地たりし樺太と交換してより、始めて今日の境界を成すに至りしことは、前已に之を述べたり。

露人が尙擇捉島にまで、其手を伸ばさんとせしかば、寛政年間近藤重藏は、露人の木標を撤去して、島の東北部薬取郡の山に「天長地久大日本國」の標柱を建て、以て其領域を明にせり。此事は今日に至りて尙史上の快事となす所なり。擇捉島に、文化年間箱館奉行羽太正養の建てたる蠣塚の碑あり、擇捉郡にありて、歸化のアイヌが剪りし蠣を埋めて紀念とせしものなり。其碑文は、當時警衛撫育の消息を傳ふるものにして、中には、高田屋嘉兵衛の航路を開きし事なども、あれば、頗はず左に之を抄出す。(本文は萬葉假字)

エトロフ島は東蝦夷地の奥にして、一松前を去ること三百里ばかり、其島の廻りは二百六十里に過ぎ、北極の地に出づること、五十度に餘り、極めて寒し。寛政の頃はひより蝦夷が島の事を所置せさせ給ひしを享和二年には、筑前守藤原安論と、正養とを其司として、彼の千島の事を司らせ給ふ、其中に、此島は外國に近ければ、衛護最も嚴なるべしとて、其官吏を選び、初

高田屋嘉兵衛航路を開く

には、近藤重藏、守重、山田鯉兵衛嘉充、其次は菊池宗内、下司には松田仁三郎、關谷茂八、柳權十郎等、かはる〳〵此處を承る。此地は大灘の離れ島にして、古へより船の往來たやすからざるにより、こゝに住める夷等衣食の品をはじめ、魚捕る具など備らず、飢寒に迫るもの其數を知らず。彼の諸官吏之を憂ること切にして、攝津國兵庫の船人高田屋嘉兵衛と云ふ者は海路の事に巧なればとて、此者を薦め舉げて、船を遣らしひるに則ち水路を考へ得て、初て大船の往來をしてより、年毎にわたる船絶えず諸の品を運送し、魚探る具も全く備りければ、夷等生業の道を得て、始めて衣食に足る事を知り、手の舞足の踏を覺えず、朝夕遙に本邦の方に望み、其國恩を仰ぎてやまず。抑此島は、外寇の警衛のみにして、苟も國益を謀るべきにわらざりしが、思はざりし所も開け、人も增しける程に、其國産を出すこと、數萬士許多を選りて守らせられ、此警衛はこゝのみにわらず、蝦夷地のうちわまた所にして、兩家の功績亦大なりと云ふべし。已に斯く內外の所置全

アイヌの移俗

く備りぬ。斯くて夷等其國恩を惶み奉るの餘り、髮を被り裙を左にしたる、姿を、漸く、皆、上國の風俗を願ひ、自ら長き髯を剪り、髮を結び、男も女も、夷の、姿なるもの、今や、一人もなし。げにや風を移し、俗を易ること、彼の諸官吏の功績にて、固より仁政の及ぶ所なり。則ち剪りたる髯を集めて、此碑を立て、髯塚と名づけて、其國恩の著しきを、不朽に留むるのみ。歌に曰く、

露人の千島經營

かしこしな、今その時を蝦夷が住む千島に餘る御代の恵は、

其撫育の政策の、漸く松前氏の方針と異なるに至りし狀を見るべし。蓋露人の方針は、つとめてアイヌを撫育し、風を移し俗を易へ、宗教を布きて、以て占領の根底を固むるにありしかば、我方針も、之に對して一變せしものならんか。

千島アイヌ

露人の感化を受けし千島アイヌ又は、今は移されて色丹島にあり、風俗は今尚前の感化を維持して、粗末なる洋服をつけ、名前の如きも、露國風のクリスチアンネームを以て命ずるなり。尤も衣服は、我政府より給せられたる和服をも着するなり。其數は僅に六十人ばかりにして、我政府より食料を給せられ、特別の保護を被るに拘らず、尚極寒の故郷を慕ひて、其放還を

火山

鹿物

冀ふと云ふ。其住居は固有の竪穴の穴居にして、アイヌの口碑は所謂コロボックル、トイチセルグに一致す。

千島は所謂千島火山脈の通過によりて噴出せられたる火山列島なれば、火山の多きこと、固より其の所なり。現今世に知らるゝものゝみにても、三十以上あり、擇捉島のモヨロ岳、アトサ岳、國後島のチャチャ岳、羅臼岳の如きは最も著し。チャチャ岳の頂上は火口湖を成し、其水西に流れて瀑布となる。千島氣候寒く、土地多くは磽确にして、耕作に適し難し。而も沿海には膃肭、海豹、膃肭獸等の海獸を始めとして、魚類の利甚多し。

參考書　北海道志二十五册　蝦夷風俗彙纂二十册
松浦竹四郎の各地の旅行記等

本邦地理講義終

本書の讀者は先づ左の誤字を訂正せられたし。

「●」印あるものは正誤せしものなり

頁數	行數	誤	正
七	九	中國地方服屬の傳說	全く別國なりし事
七	九	全く別國なりし事	中國地方服屬の傳說
二一	一〇	助くるにあひしかば	版圖を失ふ
一一	一三	版圖を失ふ	助くるにあひしかば
一七	九	假字にば	假字にては
二一	一〇	支那にては	中部に於て衝突し
二六	一三	中部に於て衝突し	支那にては
二六	一三	篠頭	樺太山系
二八	六	富士の山容、秀峻	過去無數の年限
二八	一三	過去無數の年限	富士の山容、秀峻
二九	一	(三角洲の傍測)でるた	(三角洲の傍測)ナフラ
三〇	四	來遊を待つものあり	(國栖の傍測)くす
四一	四	(國栖の傍測)くす	來遊を待つものあり
四八	三	市として	國東二十八國
四九	五	亘るあり、又黑田、山內	近江伊賀を以てすれば、
五〇	五	寡職とす	武藏の及ぶ所多くは坂東八州
五〇	一二	山間を行くもの	大八洲國(二四頁の六行、二七八頁の四行にも)
五一	九	攝津職	

頁數	行數	誤	正
五二	一〇	石城	弘仁十四年
五二	一六	弘仁十四年	石城
五三	九	弊城	八道八十五國
五三	一一	八道八十五國	明治廿九年以降
五四	五	明治廿九年以降	薩王をして治めしむ
五六	六	薩王をして治めしむ	地臨提要八册を推すべし
五八	二	地臨提要八册を推すべし	東京府
五八	八	東京府	樣見及比企の一部)
五八	一〇	樣見及比企の一部)	(山邊武朔)
五九	三	(山邊武朔)	(吾妻の傍測)アガツマ
五九	一二	(吾妻の傍測)アガツマ	(邑樂の傍測)ナフラ
五九	一三	(邑樂の傍測)ナフラ	關西三十八國
六二	六	關西三十八國	關東二十八國
六二	七	關東二十八國	近江伊賀を以てすれば、
六二	九	近江伊賀を以てすれば、	武藏の及ぶ所多くは坂東八州
六二	一二	武藏の及ぶ所多くは坂東八州	大八洲國(二四頁の六行、二七八頁の四行にも)
六六	八	大八洲國(二四頁の六行、二七八頁の四行にも)	

六七　七　武蔵・河別
六七　九　武内宿禰
六八　八　文字上の史料
六八　一一　古代の開化と繁榮
七三　五　帝室博物館、東京圖書館、
七三　八　今日に超過するもの
七四　二　今や人口百七十萬を算す（補）
七五　三　多くは國府と關係ある所なり
七五　五　下總の國府蹤
七五　九　八王子町
七八　四　東京市
七八　九　震に火災にかゝる
八〇　八　「椰子」を削り「バナナ」を補ふ
八一　一三　已に三十一萬に餘れる人口
八三　四　「室蘭」以下括弧まで削る
八三　五　帝國四軍港
八五　一　山の半腹に横穴
八五　四　著名なる人士の墓
八七　四　こゝに遊女あり
八七　九　旅行家として
八八　小田原の西南に石橋山古戦場あり（補）
八八　四　

九〇　鑑頭　厚總半島の殖民
九〇　一四　享保以來なり
九一　六　隅田川を以て
九二　八　下總國府のありし所
九二　一二　（常磐線の刺註）一に海岸線とも云
九四　三　身を捨てて領主に直訴し
九五　七　平姫も從て多し
九七　一　滑河の東南小御門村
九七　二　師賢、後醍醐天皇
九八　八　（六津の後註）ふッつ
九九　一一　（東北線の刺註）奥州線
一〇一　九　岩室觀音
一〇二　七　尊氏と合戦
一〇五　四　豐城入彦命
一〇五　七　途にして病で斃す
一〇七　一　歩兵聯隊
一〇八　三　集川三日
一〇八　四　兒孫大兒臣裝
一〇八　五　觀音の石像
一〇九　五　四大石門あり
一〇九　一三　湯の澤溫泉
一〇九　一三　寛政の三奇人

一一三　五　値に保存せられたる
一一八　七　日本三古碑と稱す
一一八　一三　古河の南新郷村には……舊址あり
一一九　二　小貝川を境とし
一二〇　一　幸島に作る
一二一　三　目ぐしもな見そ
一二四　三　（上北の後註）カミキタ
一二四　九　南部馬
一二七　四　（後註）あだたら
一二七　七　分水山脈
一二八　八　深山の中
一二九　一四　米澤山形を經て、北方に向て進む、他日
一三〇　二　弘前を經て羽後に入り南に進む
一三二　九　「に渦の嶽」の四字削る
一三三　一　退きし所、中村は岡氏が
一三四　一三　磐梯山（一三六頁三行にも）
一三五　一一　古墳の穴
一三五　一一　但、此歌は陸前名取郡黒塚と歌の序に見えて、實は此地に關係なし（補）
一三七　一　此所にて會す
一三七　一二　堀木は南方の名取川より出づ（補）

一三九　鑑頭　末松山？
一三九　四　觀應年中
一三九　八　燕澤（鑑頭にも）
一四〇　一三　信ずべきにあらず
一四一　五　桃生郡に
一四三　五　岩石濕に洗はれ
一四四　四　幽邃なるあり
一四五　四　會津俗松平氏
一四五　鑑頭　野邊地
一四六　八　安潟死して
一四六　一一　間苑の嶺
一四六　一三　外が濱の北端……東遊記に
一四七　二　南朝の忠臣
一四八　一三　宵森麓下より來り、更に
能代川に潜ひ
北行し橋岡・新庄等より
更に進んで羽後に
一説に國址は鳥海山の四
にありと（補）
一五一　一　四近の十一國
一五六　七　（刺註）中仙道
一五九　四　古事記
一六一　五　
一六四　八　吳碧あり

一六五　二三　燈火に換へ
一六六　一一　柏崎あり
一六八　一〇　眞野宮
一六九　四　連歌し
一七〇　三　今や西南、松本を經て、鹽尻に至るまで、全部開通す、將來
一七二　一〇　せしめたるよし古史に
一七四　四　越えて來り、輕井澤より更に進んで
一七五　三　（傍訓）たちからを
一七六　八　小山田信茂（二ヶ所あり、一七七頁、二行にもあり）
一七六　一二　甲斐に入り、西方に進む、途中なる
一七八　一　篠子峠は、日本第一の長隧道により
一七八　二　て過ぎ、甲府に至る
一七八　一〇　甲府の北方
一七八　一一　韮崎
一八〇　四　韮崎城
一八一　二　宮士川
一八二　九　或は蘆の湖の代りに明見湖を加ふ（補）
一八二　一三　富士山
火口内徑蘆に五六町、之より八方
山麓長く四方に引く

一八二　一四　建久四年頼朝富士野藍澤に狩す
東國を治せしが、死後内亂あり、長氏之に乘じて伊豆に入り、其子茶々丸を殺して、遂に
一八六　五　竹細工の製造
一八七　一三　琵琶湖のある國
一九二　三　僞作にして信じ難し
一九二　八　白鳥陵
一九二　一〇　人口廿八萬に近く
一九四　一四　（傍訓）あららぎ
一九五　三　「批目」の下の「」を削る、（二ヶ所あり）
一九五　一四　濃尾平野は半筬
一九六　四　三河を一所に集め、堤防を以て之を分つ、明治三十四年中工事成功せり
一九七　五　酒臭くも
二〇〇　一　小矢部川
二〇〇　四　元祖となり
二〇〇　一二　國分寺の所在
二〇一　七　越中志二册
二〇三　一一　人口十萬餘（補）
二〇四　一〇　倫島

二〇七　一　滝草
二〇七　二　以上二府六縣
二〇七　一一　赤石の櫛淵
二〇八　二　名所古蹟
二〇八　七　上方風となれり
二〇九　一　畿内平野
二一〇　一　富田林を經て長野に通ず
二一一　六　（傍訓）ニ井
二一二　二　古北陸道（鹿頭にも）
二一二　四　朽木崎
二一六　一〇　こゝに縣廳あり
二一六　一四　あれにしを、むかし
二一七　一三　圓城寺
二一九　六　過ぎて
二二〇　鹿頭　宗盛墓の下「肥」削る
二二三　一　山城、丹波の大部及丹後
二二四　七　南北千七百五十三丈
二二四　九　東四三百八十四丈
二二四　一一　大内裏の址は
二二五　一　左京を……賀茂川を……
二二五　二　白河の地なり
二二五　三　人口三十九萬に近く

二二五　一一　名殘として作れる
二二六　二　本堂は先年燒けたり
二二八　鹿頭　鐵道交通
二二九　一　鹿頭　酒頭童子
二三三　八　（傍訓）ばなのいはや
二三三　一二　（傍訓）いしんでん
二三四　三　龍寒野
二三五　一三　此西北にありし鈴鹿關
二三五　一　神郡名勝志　七册
二四〇　一　鳥見郷
二四〇　七　元亨釋書
二四〇　一〇　豐成の女中將媛
二四一　二　（傍訓）みみなし
二四一　鹿頭　大神の神社
二四一　一二　「苔」を「吉野口」と改む
二四一　一二　勾金著宮
二四六　一四　金辰村
二四七　一　他田幸玉宮
二四八　一一　（傍訓）くにがす
二五二　三　人口九十五萬餘
二五四　八　空堀の遺址
二五六　一二　（傍訓）こんだりよう

二五八　七　從て古來異說もあるものと見えたり(補)
二六一　八　人口廿七萬
二六四　一　饑渤峰
二六五　九　珉平燒
二六七　九　近傍なる玄武洞
二六七　鑑頭　龍野
二六八　鑑頭　室津　舟坂峠
二七〇　一〇　(傍訓)たにぐみじ
二七五　七　伯耆の大山、但馬の間鍋山の如きは
二七五　一二　八頭郡
二七五　一四　東郷の池
二七七　一二　(中海鑑頭にも)「ノ」削る
二七七　鑑頭　美保關港
二七八　六　放逐
二七八　鑑頭　籔川
二七九　一三　數首の歌
二八三　四　和氣清麻呂の由緒地なり
二八六　一〇　俄に繁盛
二八七　二　人口十一萬七千餘
二八七　一三　礒鹿なし
二九〇　四　瀬戸内海
二九〇　一四　一に下關、又、馬關、(「の」削る)
二九一　三　此地現の名産あり(「石」削る)
二九四　二　根據たりし島嶼の
二九八　七　(傍訓)たいりうに、(鑑頭)太龍寺
二九八　九　太龍寺……亘紹なり
二九八　一一　(傍訓)かいふ
二九九　鑑頭　男狭磯、勝浦
二九九　一四　以て田地の
三〇一　二　八島となす
三〇三　五　なりその坡あり(補)
三〇九　四　(附注)長岡郡の上の「大」を「O」と改む
三一〇　一三　柏島
三一三　二　九市二區
三一三　九　古事記に見えたり
三一四　五　景行仲哀二帝
三一六　四　(木線)
三一六　一〇　(傍訓)アザミバル
三一六　一三　佐世保線
三一七　八　築石と解せり
三一九　四　これを以て
三二〇　一三　大畑(一四行にも)
三二一　七　口を擁するなり
三二一　一四　芥屋に大門あり
三二三　鑑頭　神籠石
三二三　一一　香盒石の名、殘れり
三二四　鑑頭　筥崎宮
二二四　四　京都帝國大學福岡醫科大學この近傍にあり
三二五　六　高良玉垂神
三二八　一三　三國に跨れる一高山にして
三三〇　鑑頭　佐賀關
三三一　二　椎茸
三三四　九　されば其はじめ
三三六　一　「市街」の上へ「人口凡十五萬」を補ふ
三三八　一一　八代に遂す
三三九　一一　數多の火山あり
三四二　四　佐土原
三四三　鑑頭　鵜戸神宮
三四六　鑑頭　神代三陵
三四六　一〇　今の屋久島
三四七　八　黑石島
三四七　一一　硫黄島の東
三四九　四　親には告げよ、(「て」削る)
三五〇　七　(西表島の傍訓)いりおもて(補)
三五二　三　牧畜
三五四　三　中山傳信錄六册
三五四　一三　殺伐なる蠻風

本書もと講義錄として月次刊行したるものにして、誤植等布の如く多し。但、その重要なるものは、何れも訂正したるを信ず。幸に、讀者を誤ること勿からんか。

講述者識

正誤終

明治三十五年八月五日初版印刷
明治三十五年八月十日初版發行
明治三十五年十一月廿五日再版印刷
明治三十五年十一月三十日再版發行
明治三十六年八月五日增訂三版印刷
明治三十六年八月十九日增訂三版發行

本邦地理講義
定價金七拾錢

東京市京橋區鈴木町十二番地
歷史及地理講習會
東京市京橋區鈴木町十二番地
編輯者　林縫之助

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
發行兼印刷者　吉川印刷工場

東京市京橋區南傳馬町一丁目
印刷所　吉川弘文館

東京市日本橋區通り三丁目
發行所　吉川弘文館關東代理店　林平次郎

大阪市東區南本町四丁目
同　吉川弘文館關西代理店　積文社

著作權所有

明治三十五年八月五日初版印刷
明治三十五年八月十日初版發行
明治三十五年十一月廿五日再版印刷
明治三十五年十一月三十日再版發行
明治三十六年八月五日增訂三版印刷
明治三十六年八月十九日增訂三版發行

本邦地理講義
定價金七拾錢

編輯者　東京市京橋區鈴木町十二番地　歷史及地理講習會
發行兼印刷者　東京市京橋區鈴木町十二番地　林縫之助
印刷所　東京市京橋區新桀町五丁目三番地　吉川印刷工場

著作權所有

發行所　東京市京橋區南傳馬町一丁目　吉川弘文館
同　東京市日本橋區通り三丁目　關東代理店　林平次郎
同　大阪市東區南本町四丁目　吉川弘文館關西代理店　積文社

78
236
Ⓜ

023136−000−9

78−20

本邦地理講義

喜田　貞吉／著

M36
ADB−1167